

松任谷正隆の

イ業のひとりごと

11

VOL.11 ピアノの先生の思い出

たまには音楽の話でもしよう。

僕の音楽キャリアのスタートは、ありがちなピアノのレッスンからだ。

4歳の時に母親に連れられて先生のお宅を訪ねていったらしい。

たぶん、僕の通う幼稚園が目と鼻の先にあったから、幼稚園の関係者が誰かに教わって訪ねたのだろう。

けっこう急な石段を3段くらい上がったところに玄関とは別の入り口があって、

生徒はその入り口から出入りをした。

入ると6畳くらいの待合室に小さなソファが置かれていて、

必ず前の生徒の弾くピアノが聞こえていた。

僕は足をぶらぶらさせながら、何をするでもなく待った。

生意気なことを言うなら、他の生徒のことを上手い、

と感じたことは殆どなかった。

ピアノの実技が終わると少しだけ聴音。

和音の音を当てるのである。ドイツ読みだった。

ドレミとは言わず、ツェーデーエー、で答える。

これが始まると僕の番は近いというわけだ。

ありがとうございました、みたいな声が聞こえ、

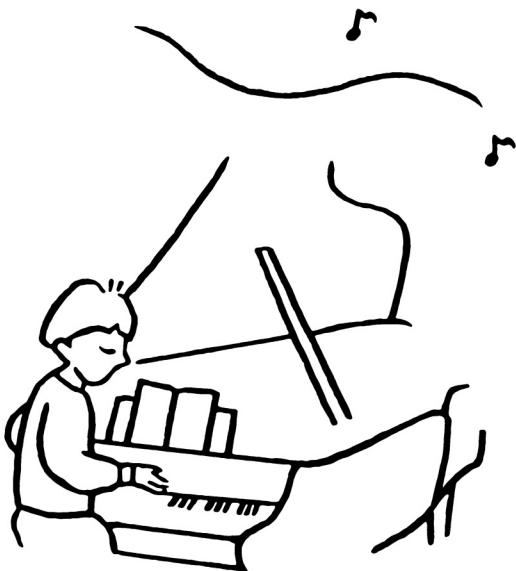
前の生徒が帰っていく。たいてい女の子だった。

あとでわかるのだが、この先生、東洋英和女学院のピアノ課の先生で、

だから生徒は女子ばかり、というわけである。

先生は初めて会ったときからかなり年配といった印象で、特別厳しくもなく、

かといって甘いというわけでもなかった。



先生は僕の左側に座り、僕はペダルに足が届かないから、子供用の補助ペダルを使った。
ピアノの部屋もそんなに広くはなく、たぶん6畳程度だったのではないか。
グランドピアノがいっぱいに置かれている感じだった。
先生のグランドピアノは鍵盤が硬く、なんだかいつもうまく弾けなかった。
うちのピアノならもっとマシに弾けるのに、と思った。先生は僕のことを可愛がってくれたのかどうか、
最後まで分からなかったが、少なくとも僕は高校生になるまでは通い続けていたから、
才能なしとは思われていなかったのだと思う。
高校から通わなくなってしまったのはバンドの方が面白くなってしまったからだ。
フォークバンドだった。ギターを抱えて歌うのは楽しかった。こっちが音楽なら、
ピアノのレッスンは音楽だと思った。自分の中で全く違うものだったのだ。



今から10年ちょっと前、ふとしたことで先生がまだご存命なのを知った。
104歳になるという。これはたいへん、すぐに会いに行かないと
取り返しの付かないことになる。
訪ねていくと、入り口こそちょっと移動していたが、同じ家だった。
先生はうっすらと覚えているようで、
僕が母親と最初に訪ねていったときの光景を細かく話してくれた。
僕の記憶からは飛んでいる光景だった。
せっかくなのであの頃練習した曲を弾くと、
先生は途中で眠ってしまったようだった。
でも弾き終えて先生を見ると、ふと顔を上げ僕にこう言った。
「松任谷君、留学したらどう？」
あれはどういう意味だったのだろう。
上手くなった、という褒め言葉だったのだろうか。

先生はその翌年に他界されたが、あの時の困惑した気持ちと、
最初と同じように硬くて弾きにくいピアノのキーの感触がいまだにはっきりと残っている。



松任谷 正隆（まつとうや まさたか）

作編曲家、音楽プロデューサー。
4歳からクラシックピアノを習い始め、14歳の頃にバンド活動を始める。
20歳の頃プロのスタジオプレイヤー活動を開始し、
バンド“キャラメル・ママ”、“ティン・パン・アレイ”を経て、数多くのセッションに参加。
その後アレンジャー、プロデューサーとして多くのアーティストの作品に携わる。
鈴木茂、小原礼、林立夫とともにバンドSKYEを結成。
2021年10月、デビューアルバム「SKYE」をリリース。
日本自動車ジャーナリスト協会に所属し、「日本カー・オブ・ザ・イヤー」の選考委員も務める。
著書に「松任谷正隆の素」「おじさんはどう生きるか」などがある。

イラスト：W.Valy